

宮中晩餐会におけるウィレム・アレキサンダー・
オランダ王国国王陛下のお言葉（日本側作成仮訳）

2014年10月29日

天皇陛下、

本日は、陛下及び美智子皇后陛下のお招きにあずかり、王妃と私の喜びとする
ところです。また、皇太子徳仁殿下及び皇太子妃雅子殿下にも御臨席を賜りま
して喜びもひとしおです。

私はこれまでに幾度となく貴国を訪問しておりますが、国王として来日するの
は今回が初めてです。欧州以外で、初めて国賓として訪問するのは、独自の歴
史を共有し、栄えある未来を分かち合う貴国でした。

偉大な俳人 芭蕉が1679年に詠んだ俳句を御紹介させていただきます。

「阿蘭陀も 花に 来にけり 馬に鞍」

オランダ商館の一行も桜の花を見にやってきた。さあ馬の背に鞍を置け。

季節は春ならぬ秋ですが、この句を気に留めたいと思います。その句は、オラ
ンダ人が貴国への上陸を許可された唯一の西洋人だった時代を思い起こさせま
す。

出島のオランダ商館は、200年以上に渡り日本と西洋を結ぶ唯一の接点でした。
二つの世界、二つの文明の間の狭き橋であり、香辛料、砂糖、織物や銅製品の
交易が行われただけでなく、書物、楽器、芸術品、更には知識や思想などを運
んだのです。

この史跡の保存と橋の復元事業を実施する長崎市に賞賛の意を表するとともに、
いつかその橋を渡る機会が訪れることを楽しみにしております。

かつて出島は私たちが互いの言葉を習得し、科学や文化を学ぶ場所でした。オ
ランダ語の書物を通じて西洋の学問を修めた蘭学者たちは重要な役割を果たし
ました。実際、そのうちの一人で、オランダ語に通じた福沢諭吉の肖像は貴国
の一万円紙幣に使用されています。日本が長らく、小さなオランダという窓を

通して、西洋を眺めていたことを思うとき、私は深い感慨を覚えます。

天皇陛下、

貴国の開国以降も、蘭日両国は緊密であり続けました。医科学や水利工学分野はその一例であり、オランダ人土木水利技師、ヨハニス・デ・レイケの名前は今日に至るまで語り継がれています。しかし、貴国には、当時既に水利工学の長い伝統がありました。出島は、その最たるものと言えましょう。海に浮かぶ人工島は、杭の上に築かれ、幾多の台風を凌いできました。

我々は先人の歴史を決して忘れません。彼らの勤勉さ、創造性、功績そして互いの交流が土台となり、今日が築かれました。彼らの歴史に「終わり」はありません。我々は祖先の残した美しい遺産と苦しみ遺産のそのいずれをも引き継いでいます。

第二次世界大戦で我が国の民間人や兵士が体験したことを我々は忘れません。忘れることはできません。戦争の傷跡は、今なお、多くの人々の人生に影を落としており、犠牲者の悲しみは今も続いています。捕えられ、労働を強いられ、誇りを傷つけられた記憶が、多くの人々の生活に傷跡を残しました。日本の国民の皆様もまた、先の大戦において、とりわけ戦闘が苛烈さを増した終戦間近、大変な苦しみを経験されました。

和解の土台となるのは、互いに背負ってきた苦痛を認識することです。両国の多くの国民が和解の実現に向け全力を尽くしてきました。こうして双方の間に新しい信頼関係が生まれました。

幅僅か5メートルの狭き橋が何世紀にも渡って両国の縁を取り持ってきました。そして、いまや、両国を繋ぐ友好と協力の架け橋は数えきれないほど存在しており、海、空、サイバー空間を縦横無尽に駆け巡るまでに広がりました。

現在、オランダに進出している日本企業数は450社を超えており、我が国で3万5千人以上の雇用を創出しています。同様に、我が国の起業家や専門技術者も貴国の発展に貢献しています。特に、両国は、持続可能なエネルギー源の開発に向け、緊密に協力しています。オランダはまた、2011年の東日本大震災の津波により甚大な被害を受けた宮城県の園芸農業復興に貢献できることを光榮に思っております。

オランダと日本にとって、少子高齢化社会の中でいかに繁栄と生活の質を確保するかは共通の課題です。長期的に持続可能な成長を実現させるためには知力と決意が不可欠です。必要とされている改革は容易なものではありません。もしもこの分野で互いに影響を与え合える 2 か国があるならば、それは、日本と我が国においてほかにないでしょう。両国で活躍中のデザイナー、研究者、芸術家、新進気鋭の起業家の果たす力強い役割に鑑みれば、我々は共に多くのことを達成できるでしょう。今回の訪日により、こうした原動力がより強まることを願ってやみません。

同じことが国際法秩序、平和と安全保障に対する共通の責任についても言えます。日本は、平和を希求しており、より積極的な貢献によって、世界で平和を育むための最適な方法を検討しています。オランダは貴国のそうした取組を評価しており、2004 年から 2006 年にイラクのムサンナーで日本が果たした人道的役割は我々の記憶に新しいものです。イラクでは、オランダ国防軍と日本の自衛隊が緊密な協力のもと活動を展開しました。

天皇陛下、

両国の協力関係の礎は、今からさかのぼること 4 世紀以上前、1609 年に将軍徳川家康が、私の遠い祖先にあたるマウリッツ公に送った一通の手紙から始まりました。その手紙に書かれていた言葉を御紹介します。

「志（こころざし）を保つふたつの国がその目標に向かうとき、両国の間にどれだけ隔たりがあろうとも両者を遮るものは何ひとつない。オランダ船に対し、国内のあらゆる港への寄港及び停泊を許可する。両国の友好の一層の進展を願う。」

4 世紀に渡り続く家康の願いは、我々オランダの願いでもあります。

御来臨の皆様、グラスをお手にお取りください。

天皇皇后両陛下、

両陛下と御一家のますますの御健康をお祈りするとともに、両国の友情が、幾久しく、花を咲かせ、実を結びますことを祈願し、私の挨拶とさせていただきます。乾杯。